# リゼッタの背中

桐 紅丘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リゼッタの背中

【Ｎコード】
Ｎ６６０７Ｖ

【作者名】
桐　紅丘

【あらすじ】
悪徳の魔女によって世界は破滅の危機に陥っていた。
魔女が現れて２０年、魔女を倒し、世界を救う為に選ばれたフェリシア・ヴィクトリウスは、パートナーと共に魔女との最終決戦に臨んだ――。

## 最終決戦（前書き）

人の死ぬ場面、流血描写があります。

苦手な方はご注意ください。

## 最終決戦

フェリシアは悪徳の魔女と呼ばれる世界を破滅の危機に陥れたリゼッタ・グローリアと対峙していた。
お互い満身創痍で、息もかなり上がっている。
だだっ広い荒野には、ところどころに魔法の衝撃の痕が残り、二人の戦いの凄まじさを物語っていた。
フェリシアは口の中で呪文の詠唱を続ける。
彼女の斜め後方には、パートナーのアルギリウスが同じく杖を構え、リゼッタに憎しみの篭った眼差しを向けていた。

「悪徳の魔女！これで終わりだっ！！」

フェリシアは長い時をかけて、リゼッタを倒すためだけに、編み出したヴィクトリウス家の呪文の最後を高らかに詠唱する。
それに合わせてアルギリウスが魔法の効力を増幅させる魔法をフェリシアにかける。
リゼッタは、聞いたことのない呪文に一瞬眉を潜め、すぐに守護の魔法を詠唱する。
リゼッタはもともと栄光の魔法師と言われる光のグローリア家の出身だが、その身に宿る力は闇だ。
リゼッタの体を纏うように、闇が覆いはじめる。
さらにその周囲を球状に輝く黒がリゼッタを覆う。

「……闇を切り裂き、穿ち、散らせ！
世界と私を繋ぐ光の導べ！！
繰り返し、やり直し、仕切り直す栄光の闇を壊し、滅し、亡ぼせっ！
勝利の光輝（ヴィクトリウス・ブリリアント）！！！」

白の、青の、赤の、黄金の、あらゆる光がフェリシアのもとに集束する。
集束した先から、圧縮された光が光速でリゼッタに向かう。
リゼッタを倒す為だけに、闇の魔法を打ち破る為だけに作られた魔法は、闇の守護魔法を突き抜け、内から霧散させ、リゼッタの体を覆う闇の纏衣も蹴散らす。

「くっ……ハッ！」

リゼッタの闇が全て消え、その奥から苦しみに満ちた声が聞こえた。
トサッと軽い音がして、荒野に女が倒れる。
フェリシアとアルギリウスは慎重にリゼッタに近寄る。
フェリシアは杖を刃に見立てる魔法を紡ぎ、アルギリウスは自分とフェリシアを守る魔法を使う。

「……まだ生きているの」

フェリシアは目を見開く。
リゼッタは虫の息ながら、まだ苛烈な瞳と嘲笑うような表情を顔に浮かべていた。
リゼッタの纏う黒衣から、鮮やかな紅い血が茶色の地面に染み込んでいく。

「安心しろ。
私はもう死ぬよ、フェリシア・ヴィクトリウス……」

フフッと笑いながら、リゼッタはその視界にフェリシアを入れる。

「何故、世界を滅ぼそうなんてしたの」
「フェリシア！」

リゼッタにフェリシアが何よりも聞きたかったことだ。
まだリゼッタを警戒しているアルギリウスはフェリシアを止めようとするが、フェリシアは聞くそぶりを見せない。
一回りは年の離れたリゼッタとフェリシアは黒と金の瞳でお互いを見つめる。
リゼッタが凶行を始めたのは、ちょうどフェリシアとアルギリウスが生まれた２０年前だ。
リゼッタのせいで二人とも、いや二人だけじゃない。
世界中の人が大切な人達を失ってきた。
だから、フェリシアにはリゼッタが世界を滅ぼそうとした理由が知りたかった。
フェリシアの問いにリゼッタは目を細めて、空を見上げる。
この凄惨な最期に相応しくないくらい青く晴れ渡っていた。

「よくあることさ」

リゼッタはそう言って口を開いた。
死にかけの人間とは思えぬ程はっきりとした口調だった。
リゼッタは急速に体温が下がっていく自分を自覚しながら、この時の為に生きてきたのだと思った。

「魔法は血脈に受け継がれるとされていた。
今でこそ人工的な開発もされているが、私が産まれた頃は血が全てだった。
そんな中で私は光魔法の名門グローリア家に産まれたにも関わらず、全く魔法を使えなかった。
だから、親族に見捨てられた。
それでも血に力は宿ると信じられ、私の子にはグローリアの力が引き継がれるだろう、と１５の年にすぐ嫁がされたのさ。

魔法の使えぬ私は嫁ぎ先でも冷遇され、まだ学院に通っていたからね、学院でも落ちこぼれとしてひどい扱われ方をした」

「それで世界を恨んだとでもいうのか？」

アルギリウスの憎しみの篭った声が降り注ぐ。
リゼッタはちらりとアルギリウスを見て、フェリシアに視線を移してから、空に戻した。

「そんなものどうでもよかったよ。
生まれた時から蔑まれているんだ。
大して気にもならなかった。
それに夫となった人は優しかった。
愛されてはいなかったけれど、魔法も使えぬ私に彼は優しくしてくれた。
それが私には救いだったのだよ」

空に注がれる慈しむようなリゼッタの視線は、とても悪徳の魔女と呼ばれた人間と同一人物とは思えないほど穏やかだった。

「一年後には子供も生まれた。
その子は私と違って、ちゃんと魔法の才能を持っていた。
私にはそれが何よりも嬉しかった。
私の存在意義を認めてくれた子。
我が子は私と同じような目には合わない。
だから、歓喜に胸が震えて、我が子を抱いて眠りについた」

リゼッタの話が止まる。
フェリシアはリゼッタを凝視する。
一挙手一投足見逃さないように。

「翌朝、起きて絶望した。我が子は腕の中から消えていた。
半狂乱になって、我が子を求める私のもとに夫が現れた。
我が子は預けたと。
力のある我が子は、お前には育てられないからと。
私の存在意義が、愛しい何にも変え難い宝は、一日で私の元から消えてしまったんだ。
その時、初めて世界を憎んだ。
なぜ、私から全てを奪うのかと。
なぜ、私を貶めるのかと。
家族に愛されず、力を持たず、夫に愛されず、子を残すだけの道具と成り果てた自分から、何故子まで奪うのかと。
あの子がいなくなった時に世界はどうして終わらないのかと。
世界を、夫を、全てを憎んだ。
終わらないなら、終わらせてやろうと思った。
そうしたら、闇の魔法が使えるようになったのだ」

「それが……理由？」

フェリシアの小さな呟きに、ありがちな話だろう、とリゼッタはクスクスと笑う。

「そうだよ、フェリシア。
クライシス・ヴィクトリウスの娘。
我が愛し子」

リゼッタの微笑みと共に零れた言葉にフェリシアとアルギリウスは瞠目する。

「は？」

「お前はクライシスと私の子だよ。
愛しい愛しい我が子。
ようやく会えて嬉しいよ。
さぁ、私の世界を終わらせて？」

「はは……おや？」

「しっかりしろ、フェリシア！
ただの出まかせだ！
惑わされるな」

「そうだ。
こんな簡単なことで揺さぶられるなんて、救世主が聞いて呆れるな」

茶化すリゼッタをアルギリウスが睨みつける。
フェリシアはリゼッタの言葉に羞恥を覚えて、杖の刃を鋭くさせる。

「謀ったわね！」

リゼッタはクスクスと笑い、また空を見上げる。

「さぁ一思いにやってくれ。
もうそろそろ苦しいな」

「アンタの言うことなんて、どうして聞かなくちゃ……」

「救世主が敵を倒すために、必要以上にいたぶるのか？ご立派なことだ」

リゼッタの嘲りにフェリシアは怒りを無理矢理鎮める。
刃をリゼッタに突き付けると、彼女は優雅に笑った。

「これで終わりよ、悪徳の魔女！」

フェリシアの叫びと共に、刃がリゼッタの胸に深く突き刺さる。
一瞬リゼッタの体がビクンと跳ね、静かに目を濁らせていった。

「…ら、ぃ…ス」

空に手を伸ばしたリゼッタの口から零れた声にフェリシアははっとして、叫んだ。

「父様はアナタをちゃんと愛してたわ！」

リゼッタに届いたか届かなかったか。
彼女の魂はこの世から消え去った――。

「フェリシア？」

フェリシアの最後の叫びに驚愕の眼差しを浮かべてアルギリウスは見つめる。
リゼッタの体はフワッと浮いて、闇に溶けて、霧散した。
残ったのは、リゼッタの首にしていたのだろう雫型の琥珀のネックレスだけだった。
琥珀のネックレスを拾い上げながら、涙を流すフェリシアにアルギリウスは困惑を表情に出す。

「フェリシア、どうしたんだ」
「あの人は、本当に私の母親だったのよ」
「何言って……」
「……世界は救われたわ」

フェリシアは広がる青空を見上げた。

ほら、ありがちな話だろう？

笑い声が聞こえた気がした――。

## 宴の夜の静寂（前書き）

悪徳の魔女との戦いを終え、帰還したフェリシアとアルギリウスの為に、盛大な宴が催される。
その宴の最中、フェリシアは宴席の端で酒を嗜む父親に近付く――。

## 宴の夜の静寂

父様、これを。

世界の敵を打ち破り凱旋した娘は、祝宴の合間にそう言ってそっとクライシスの手にものを握らせた。
フェリシアは、少しだけ悲しげな笑みを浮かべてから祝宴に戻っていった。
救世主となった娘の背を見送ってから、クライシスは人目を避けるようにバルコニーに出て、手を開いた。
娘に握らされたものは、昔、自分が妻に送った首飾りだった。
小指の爪程の大きさの雫型の琥珀がついた首飾り。
それと同じ形をしたオニキスの首飾りが、クライシスの胸元を飾っていることを知る者はいない。
クライシスは、琥珀の首飾りをギュッと握ると、夜空に浮かぶ月を見上げた。
白く美しい満月だった。

青臭い真似だ。
クライシスはその自覚を持ちながらも、高鳴る心臓を隠すのに必死だった。

光魔法の二大血統が一つヴィクトリウス家の後継ぎとして生まれたクライシスは、魔法の才に溢れた青年だった。
厳格な名門の家の後継者たる彼は、当然厳しい教育を受け、ヴィクトリウス家の名に恥じぬ青年に成長していた。
容姿端麗、魔法の才能に恵まれ、頭脳も明晰とあれば、女には引く

手数多だった。
しかし、ヴィクトリウス家を継ぐことを第一に考えていたクライシスは、後腐れない人間としか付き合わず、面に貼付けた無表情が変わる程、感性を揺すぶられる人間に会ったこともなかった。

彼が２０歳になった年だ。
もう一つの光魔法の名門グローリア家から、クライシスに嫁入りの話が出た。
二大、と言われるようにヴィクトリウス家とグローリア家は互いに同程度の力を持ち、競い合う関係であった。
表立って争うことはなかったが、微妙な関係を保ち続けていたと言っていい。
そんな時の嫁入り話。
当然、ヴィクトリウス家の面々は何か裏があると踏んでいたが、何よりも血脈を大事にするのも魔法師の家系だ。
光魔法の名門同士の子の力を見たいというのもあったのだろう。
最終的には、当主たるクライシスの父の決断により、グローリアの娘をクライシスの嫁として受け入れることになった。

一年後、クライシスの元に訪れた娘は、今年成人したばかりだという黒髪に黒い目の娘だった。

「リゼッタと申します」

そういって頭を下げる娘からは光の魔力というものが微塵も感じられなかった。
こういうことか、とクライシスは思ったが、特別どうこうしようと

は思わなかった。
その代わりのように、ヴィクトリウス家の人間は怒りも露に彼女を罵った。
まさか光の力をカケラも持たないとは思っていなかったようだ。
それよりも身に纏う闇の色彩に、嫌悪や憎悪の眼差しを向ける。
必ずしもという訳ではないが、光魔法の家に生まれた者は薄い色彩を持つ者の方が多かった。
かくいうクライシスも銀に近い金髪と琥珀色の目を持っていた。
父母も似たような色彩だ。
他にも、火魔法の家には赤味の強い色彩が、水魔法の家には青っぽい色彩が多かった。

クライシスは、怒りを表す家の者を落ち着かせ、娘を保護する為に早々に、二人の家となるヴィクトリウス家の離れに引き払った。

「すまない、嫌な思いをさせた」

まるで謝っているようには思えぬ無表情で告げるクライシスに、娘は横に首を振った。

「こちらこそご迷惑をおかけして申し訳ありません。
返却なさっても構いませんから」

高くもなく低くもない耳に心地好い声は諦めきっていた。
クライシスは娘を凝視する。
まだ15とは思えぬ程美しい容姿と女性らしい体つきを持った娘はクライシスを見ようとすらしなかった。

「君は俺の妻になるのは嫌か」

気付けばクライシスはそんなことを聞いていた。
娘は首を傾げて、クライシスをやっと見上げた。
その濡れたような黒い瞳にクライシスは劣情を覚えた。

「クライシス様がお嫌なのでは？」
「そんなことは無い」

当たり前のように聞いてくる娘に言葉を被せるように否定していた。
それにキョトンとした後、娘は微かに笑みをその顔に浮かべた。
クライシスは何かが弾ける音を聞いた気がして、気付けば娘を押し倒していた――。

クライシスとリゼッタが結婚して既に3ヶ月が経とうとしていた。
その間に、クライシスは充分な程リゼッタを愛したが、どうやら本人には通じていないようだった。
その原因が自分の無表情にあるとは思ってもいなかったクライシスは、困惑していた。
その時すら困惑は表情に全く出ていなかったが。
また、両親や親族が当たり前のように浮気を進めてくるのにも困り果てていた。
どうやら端から見てもクライシスがリゼッタを愛しているとは思われていないらしかった。
両親は離れに公然と女を送ってくるし、親族はクライシスを呼び立てて女と二人きりにしようとする。
ある時クライシスは、いつもの如く親族に呼び出され、女を宛がわれかけたのをどうにか振り切って帰宅した。
このやるせない気持ちをリゼッタで癒して欲しかった。
だが、帰宅してクライシスは、目の前に広がる光景に思わず固まっ

てしまった。
両親に送られたらしき浮気相手候補の女が、屋敷の女主人よろしく踏ん反り返り、リゼッタに給仕をさせていたからだ。

「お帰りなさい、クライシス。お客様です」

この3ヶ月でリゼッタに敬称を取らせることにどうにか成功したばかりのクライシスは名前を呼ばれたことに内心喜びながら、妖艶な笑みを向ける女を睨みつけた。

「リゼッタ、女はここに入れなくていいと言っただろう」

そう今までも両親が送ってくる浮気相手候補をリゼッタは当たり前のように持て成した。
浮気相手の女はリゼッタからクライシスを奪うことが出来ると信じていて、リゼッタに辛く当たるのにも関わらずだ。

「でもクライシスのお相手をする方でしょう？」

表情も変えずにそう宣ったリゼッタにクライシスは泣きたくなった。
すぐさま女を追い出し、クライシスはリゼッタを寝室に連れ込んだ。
どれだけクライシスがリゼッタを愛しているか解らせる必要があったし、いつまで経ってもクライシスを愛そうとしない、クライシスの愛を信じないリゼッタに仕置きをしたくもあったからだ。

さらに2ヶ月経って、クライシスは妻の体がわずかに変化したことに気付いた。
すぐに医師を呼んだ。

リゼッタ自身は自分の体に気付いていないのか、不思議そうにクライシスと女性の医師を見た。

「御懐妊です。おめでとうございます」

医師に告げられ、クライシスは歓喜に胸を奮わせ、リゼッタは事態を理解していないのか呆然とした。
クライシスはリゼッタを今まで以上に労ったし、安定期に入るまではリゼッタの体を思って、劣情を押し殺した。
しかし、時折リゼッタが物憂気な表情をするのが気になった。
だが、その理由を聞いて、もしクライシスの子を生むのが嫌だと言われたら、クライシスはきっとリゼッタをベッドに縛り付けてその身を壊さんばかりに抱き潰すだろうことを解っていた為、恐ろしくて理由を聞くことが出来なかった。
リゼッタとリゼッタの子を守れるのは自分しかいないのた。
もしリゼッタの子も魔法の力を持たなければ、おそらく今度こそ浮気相手を送ってくるだけでは済まされない。
それが刺客に変わるだろうことは安易に予想された。
だから、クライシスはリゼッタに首飾りを送った。
少しでもリゼッタの物憂気な様子が無くなればいいと思って。
クライシスの瞳と同じ琥珀を削った首飾りをリゼッタに贈り、いつもクライシスが傍にいることを自覚してほしかった。
そして、お揃いの首飾りをクライシスはいつも身につけていた。
リゼッタの瞳と同じ黒い宝石の首飾りを。
青臭い真似をしているな、とクライシスは恥ずかしさを覚えた。
愛する人に自分の色彩をしたものを持っていて欲しいだなんて、独占欲以外の何物でもない。
だが、それを贈り、同じものをクライシスが付けていることを知ったリゼッタは微かに微笑んだ。
滅多に見ることのない妻の笑顔に、クライシスは思わずリゼッタを

抱きしめた。

その後、結婚から1年と少しして、リゼッタはクライシスとの子を産んだ。
珠のような娘は、薄い金髪と濃い琥珀の瞳を持ち、光の魔力に溢れていた。
リゼッタは我が子を胸に抱いて、涙を流したが、体はかなり辛そうだった。
それもそのはずだ。
リゼッタには光の魔力が全く無い。
その身で、力に溢れた子を育み、生んだ。
それはリゼッタに相当の負担をかけていた。
まだ生まれたばかりの我が子は、力を抑える術を知らず、それに当てられるリゼッタに耐性はなかった。
だから、クライシスは我が子を抱いて眠るリゼッタの腕からそっと娘を取り上げると、力のある後継ぎを欲した両親に預けた。
両親は、力溢れる孫を慈しみ、可愛がった。
リゼッタの娘として蔑むことがないのは、光の力とヴィクトリウスの血を娘から確かに感じたからだろう。

クライシスはすぐにリゼッタの元に戻った。
そこには反狂乱になりながら、娘の名を呼ぶ妻がいた。

「返して、返して！」

娘を外に預けた旨を伝えたクライシスに、リゼッタは縋りついてきた。

「無理だ。お前には育てられないよ、リゼッタ」
「いや、イヤ！あの子だけなのに！私にはあの子しかいないんだっ！！」

リゼッタのその言葉にクライシスは、怒りを覚えた。
それならば、自分は何なのかと。
リゼッタにとって、クライシスは何者でもないのかと。
産後だというのにも構わず、泣きじゃくるリゼッタを押さえ付け、クライシスはリゼッタが気を失うまで自分の欲望と怒りをぶつけた。

「愛している。リゼッタ、わかってくれ。我が子の為にお前を失いたくはない」

涙の跡の残る頬を撫でながら、眠るリゼッタにクライシスはそう声をかけた。
リゼッタの体を腕に抱き、クライシスは幸せと虚無を感じながら、眠りについた――。

翌朝、目を覚ましたクライシスの腕の中は空だった。
すぐに家中を探し、娘の元にも行ったが、リゼッタの姿は見当たらなかった。
魔法の使えないリゼッタに、娘を探すことはできなかったのだろう。
クライシスはリゼッタを探索する魔法を使い続けたが、何故か霧がかかったように魔法が切断され、見つけることが出来なかった。
そしてリゼッタがいなくなって一ヶ月後、世界の端で一つの街が壊滅する。
その犯人は、リゼッタ・グローリアと名乗り、世界を破滅へと向かわせ始めた。
後に悪徳の魔女と呼ばれる女の誕生した瞬間だった。

クライシスは、長い回想から浮上した。
後ろでは、娘を讃える声が聞こえるが、このバルコニーは切り離されたように静かだ。
夜の静寂が、愛した妻を思い出させる。
手の中にあるものを贈った時の微かな笑みが今でもクライシスの胸に熱を点す。
あの時、クライシスがリゼッタの手からフェリシアを奪わなければ、世界は危機に陥らなかったのかもしれない。
それでもクライシスは後悔していない。
あの時、リゼッタからフェリシアを離さなければリゼッタは死んでいたのだ。
例え世界の敵になろうと、不幸な道を辿ろうと、リゼッタが生きていることがクライシスには何よりも大事だった。
だから、クライシスは胸に迫る思いを消そうとする。
リゼッタを殺した娘に対する憎悪の感情を。
多くは語らなかったが、娘がこの首飾りをクライシスに渡したということは、リゼッタとの関係を悟るようなことが彼女との間にあったのだろう。
そして、これを渡した時のフェリシアの表情。
それがクライシスにはリゼッタを思い起こさせる。
だから、クライシスはフェリシアを慈しもうと、憎悪を消そうと、月を見上げた。

今日だけは、妻を想って、娘を憎むことを自分に許して。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6607v/

---

リゼッタの背中

2011年10月9日10時27分発行